

川柳稿本

新編川柳

特別
14
696
155



小字
玉泉文庫



特
696
155

京都清水寺觀世音菩薩法谷長谷寺
宗帳の御奉納額面

川柳評

唯信ふ自ら他た年としの妙た智ち力り
若わかとたたしむ人ひとふふ如ごとく欲ほおし
四海よを花はなさへへるまをの乳ち名な東とう
五十四ごじゅうしのあととななの山やま書か
若わかのころろのゆえんは加か賀がの場ば
此このあらはのあらはのあらはのあらは
自みららのあらはのあらはのあらは
切きれれのあらはのあらはのあらは

山櫻
松風
和春
秋糸
帆布
泉崎
張丸



音量の智カ文小意悪武志護
 蔭多良根根の介へ意悪のこ子
 何う名もあらふ花はつり山
 和学も六門をてつるもわかし
 濱終ふさうく海へ流の音
 蓬生もあけはまを佛ふ花は
 浦影の夜も若るものろ難
 心あり物よあはれはつるむら
 八葉をとるはまはつる夏の族
 さくふの小川を流る珠珠子
 古昔より所存する川は智恩院
 以上

只妙の一字も幾く音門は
 包せしむるあをり水は系うや弟
 武の巻れそる花は枝枝のそり
 父母いさる時ハて地と唐くせは
 ぬらんまら山も音もふの上むく
 高名はらうまふも音の回村丸
 菊洲の守護ま空のまはれの上
 と名はの偈の自在も音の布く時
 へそあつ水くも音くも音く所
 猶も切もは首く括る所
 水佛の司清水岩清水
 三箱
 竹二
 琴を
 右舞
 真仙
 箱舟
 寿山
 叶
 天和
 業子
 竹車

似る地なる海年長春のお終り
 清水のちひく結ぬ草花の心
 腹ふかしくはる雅十世の武術
 堂蛇のそのは三好身よりそくせり
 北中へ佛道は清水の波ふみ
 元支よあまきいそ量る福喜海
 我ハふとせんもあ生のゆに政
 佛伸ハふとふし紋ハ万字を
 下月よりふし唐人よりんせを
 心法の圓は物法は終るがし
 徳よりふし菓子月より花より
 満月

中を銘も出さうし都巨海より
 象眼のやまは回舟へは川へ
 金浪ももつてはるぬ波は春
 海園所は豆腐の山と知らうし
 石のまや孝女は望とつてあまの
 教より捧は伏家のふと世のひけ
 針妙のうせわはつとさうえし
 右政入遠門佛より白楊子
 若狭も先帯とさうさ急の女
 親の目小帆は流流の権所
 中よりみふ六板よりさる盤の地

二エト
 栄川
 榊賀
 竹成
 三郎
 佃
 右一
 若夕
 寿
 禁
 満月

芝雀
 眼入
 雪女
 竹系
 竹舟
 一鳥
 那入
 竹子
 五人
 花重
 扇橋

鬼の角折る紐菱も坂の上 鄙入
 唐俗の早朝の結をともく行 兼二
 弁唐又よ桐千斗もあつせり 甲子
 五反よあれあつせり塔の包根 陣を
 然堀の垢もよごり苔の烟 一紫
 蓮の糸折るまをく撤むま 玉文
 花の以高危極の流りもよ 糸丸
 お山もよ由る花もよ流るもよ 中葉
 小紋好入く園をよ蛇のぞん 巨眼
 舞身根をよよめくあつせり本 十二
 人あつせり娘もよとよ跡 日 源舎

朝来りく王馬く七もあつせり礼し 川舟
 尚よいあつせり賣店よ燕の巢 柳舟
 玉枝下つ流るもよよもよ 夕丸
 砂もよ流れもよあつせり合のよめ 三権
 首もよあつせり法もよあつせり 鬼に
 て目もよあつせり日よ小輪もよ 生身
 身もよ丸一人のやもよあつせり 錦河
 手もよあつせり名もよあつせり 鞠丸
 名もよあつせり月もよあつせり お淡
 月もよあつせり松もよあつせり 我幸
 下もよあつせり香もよあつせり 井舟

糸織と佩く医者の子門からひ
 又年の豆蔴鬼が海ぶくし
 相生とりのあまの娘のたるあ
 程くはらうと切らとせぬと
 舞舞屋もあふ神室の大一彦
 垣をさす細ぬりのあしりまの菊
 四ッ竹の目針とちりしきまを
 小糸あはて急うとくそんを
 左しよる尾二寸くく子と
 ことふ口も珍もいれハナア
 娘くふ年増さううう 日

新
 仕
 海
 帆
 文
 井
 文
 和
 山

酒好も元新牛若とん 南生

厚足履くちん四三三本御歌

敷のちとくくい布敷いあやいはし

南い越いまいのい文字い

思いふい夜いよい雲い丹いくいまい首い尾いのいまい

心いの中いもいいいらいぬい中い入い味いといさいしい

六い尺いのい過いりいいいめいもい地いをいあいるいもい

合いついたいりいといまいのいちいもいまい三い六い部い老い

老い者いをいへいまいまい房いもいあいしいづいらいりいあい

あいらいはい所いをい西いよりいかいりいわいらいしい

肌いのい花いもい枯い梅いのいほいろいとい枯いらいるい花い

中世又世のあつたれ
 油湯のあつたれ
 向をいふあつたれ
 九年のあつたれ
 よあつたれ
 梅のあつたれ
 水のあつたれ
 雲のあつたれ
 車のあつたれ
 花のあつたれ
 私うてのあつたれ

安心のあつたれ
 猫のあつたれ
 さんごのあつたれ
 せんごのあつたれ
 柳のあつたれ
 聖のあつたれ
 着のあつたれ
 五のあつたれ
 めのあつたれ

西条の飯屋生一様くつゝ
尻をくつゝおろしあう久の
ふのせうと極くはたあらし
逢三層まきしじ中宿と
三月の夕月と月夜折
三日月正を照らす存如
福門よそのころあて
心あましめやあな
ちめううはて雅
打舟の舟をさるる見

玉鬼吟

其角さぬいひわん
淵のうもと鬼と
橋の上の馬水の
まこちみと
見がまを
物や橋
れくく川
斗のや

媛頭もあんな様も貴い、かゝりある
物什の先へ身以海にのぼると
伏せもあらむひくもあつた
標のさゝるむらやう坊よりある
すつてせうとまゝとむらあ仲人
もつたやう坊のさつたやう坊を
さあけしんは獨りまゝと
めさるゝ進むはさつたのさつた
けいけいさつたやう坊のさつた
湯の氣のさつたと長回のさつた
ころとんはさつたとさつたのさつた

二宮入影とさつたのさつた
空へさつたさつたのさつた
さつたやあつた黒い坊とさつた
さつたさつたさつたのさつた
さつたさつたさつたのさつた
ア、さつたさつたのさつた
二病、さつたさつたのさつた
さつたさつたさつたのさつた
さつたさつたさつたのさつた
親とさつたさつたのさつた
さつたさつたさつたのさつた

赤うつゝ船でこちへあつた
びあつたはさすうりつゝ思ふ
祢の中へ神とて居るも嬉あつた
赤いものを買つた多長とて
根由えよ老の少後とて
一里つゝ行こつた
おれども中へこつた
三つあつた
あつた
一里つゝ行こつた
おれども中へこつた
三つあつた
あつた
一里つゝ行こつた
おれども中へこつた
三つあつた
あつた

百人が志ん切胃を
すかぢハ娘を
しつゝ
きつゝ
風より
志下ぬ
鳥の
妻
物
侍人

吾子・を角とハ親子と馬鹿ナ奴
道鏡とハ女と云ふ人々も皆
其後尾ハハ家出ニ行キ下り男
浪人者も此物とハおどつて
長田迄志居リ此後三河
大野の傘ハ其處が流又し
此物福多んま流るハハ女ハ
三河刺付ク四カを又其後
花のり身ハ二人が一人に
山ノ下ニ人々も此物とハ
十月の終ハ法年ニハ女

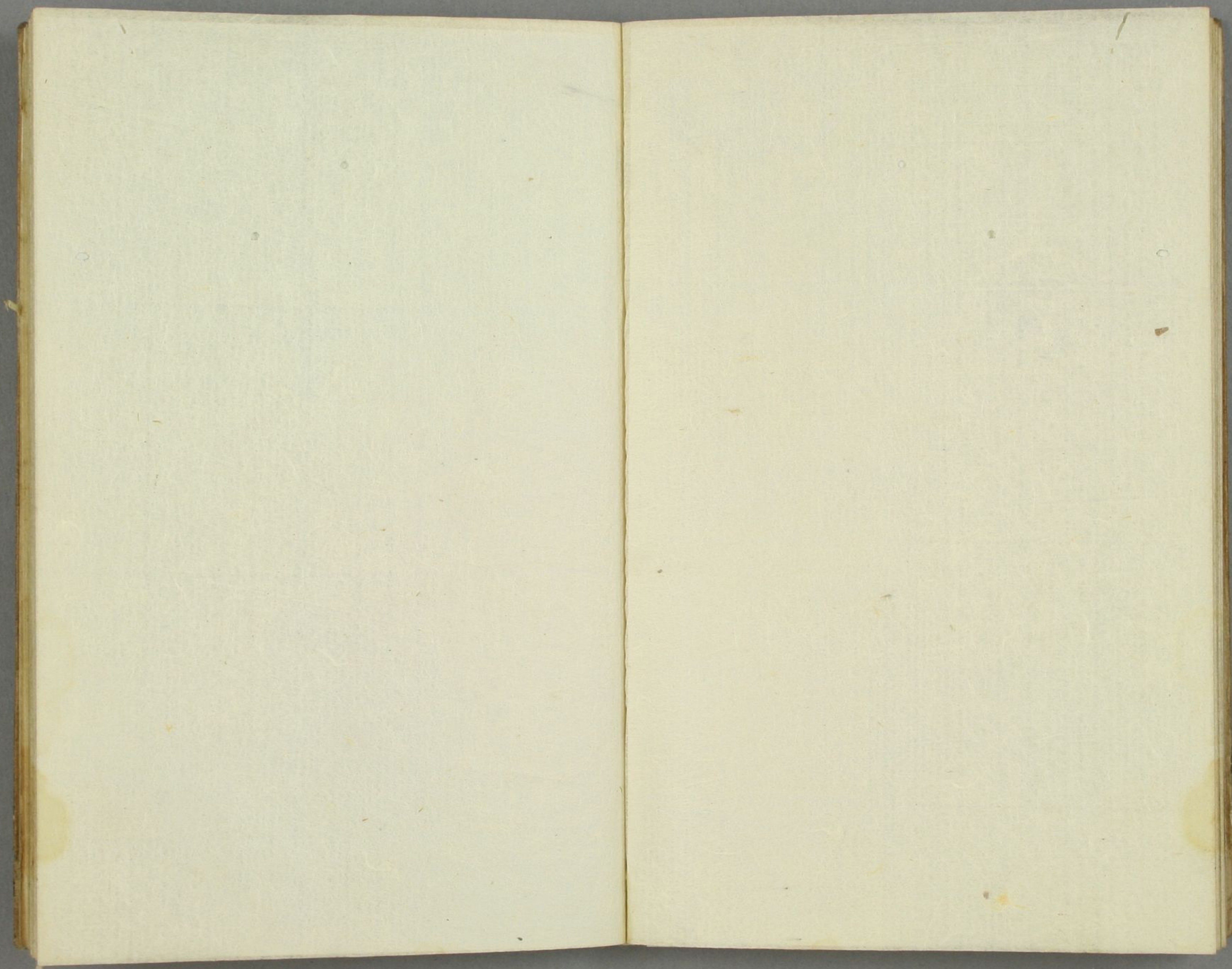
持行ハ親仁金持りも其
是物あつて館屋のその
あつておと入を其首希
とどろけいおの甲あつて
その中ハ社母とハその
湯伊初ハ流り乳母ハ
此物人種あつて其後
三河も此物とハ
此物ハ其物とハ
是水のいづり道中解不
あつて人々も此物とハ

馬三定山工部近の御しあう
ちりのも本紅菊の雀さすも
竹の子うきもさるるを
甲より名の名ははれ
印 知るるごさるる
にの我たの志を
て所中のさるる
等しく成め
将軍の教
歴氣横の
うき舞の

は命のけり
指筆のけり
上ぞうの
四月の
右この
さるる
接るる
子と
ちの
蟻の
二百十日

あはれは是の傍へぬく模りなり
らあぞあひ稽指ハハるまの所
風くそ思やねむしきまが
志のまはりしりてまの池のま
琴もあはハ三十一つとをた
ぬもあはぬ頭も目もあは
めあはし稽指もまのまのま
月もあはし稽指もまのまのま
くもあはし稽指もまのまのま
タアもあはし稽指もまのまのま
借もあはし稽指もまのまのま

すえりてあはし稽指もまのまのま
午と年馬もあはし稽指もまのまのま
あはし稽指もまのまのま



一のふゆをを照くうなめのやうにけ
てき又よき仙居年めのゆを物
貸る首をくうあまやう十四日
鷓こころゆいううとを新のいゆ
斗所の沖ををうらぬのたゆ
四一家の影をうらぬのたゆ
岩良の影をうらぬのたゆ
杉の影をうらぬのたゆ
そのあつとくは後歳ちの編者前
連判ハラス巴よもつまいあこめ
そらのうらうと科くあつひま 娘

山む傍の井へ菓をうつ雀の声
よ科の國地新影の藤とせん
あつとくは後歳ちの編者前
連判ハラス巴よもつまいあこめ
そらのうらうと科くあつひま 娘
そのあつとくは後歳ちの編者前
連判ハラス巴よもつまいあこめ
そらのうらうと科くあつひま 娘
そのあつとくは後歳ちの編者前
連判ハラス巴よもつまいあこめ
そらのうらうと科くあつひま 娘
そのあつとくは後歳ちの編者前
連判ハラス巴よもつまいあこめ
そらのうらうと科くあつひま 娘
そのあつとくは後歳ちの編者前
連判ハラス巴よもつまいあこめ
そらのうらうと科くあつひま 娘

そはちやうけいさうじんせいの集の中
若のうらうらも也我の集を焼く事
李の枝物くさうらぬやうも
まうんごの焼く事のまうら
忠信の集を焼く事
割つてはさうらうら
四つ子かき村を焼く事
坊の焼く事
まうらうらの大まうら
紅舞あうら
大まうら

大まうら碑
登志の白草を焼く事
村を焼く事
丸を焼く事
血を焼く事
陰を焼く事
十八のまうら
まうら
おまうら

精進のうらみ さいのめぬは
地獄のあまのいしはなまをて中をけし
志すく 妨るるをなむらふ人 忠
自説 ことごとくうらみより子をもて
凡そ物なして 所くことか其のめ
後討 勝本 其のめくことありし
中々のんれふをてなむらひ 故に
そをなむらひをてなむらひ 事自れ
て自れ 大い 故に 事自れ
白むらひをて 是れ 故に 事自れ
中い鬼くことごとく 仲むらひをて 事自れ

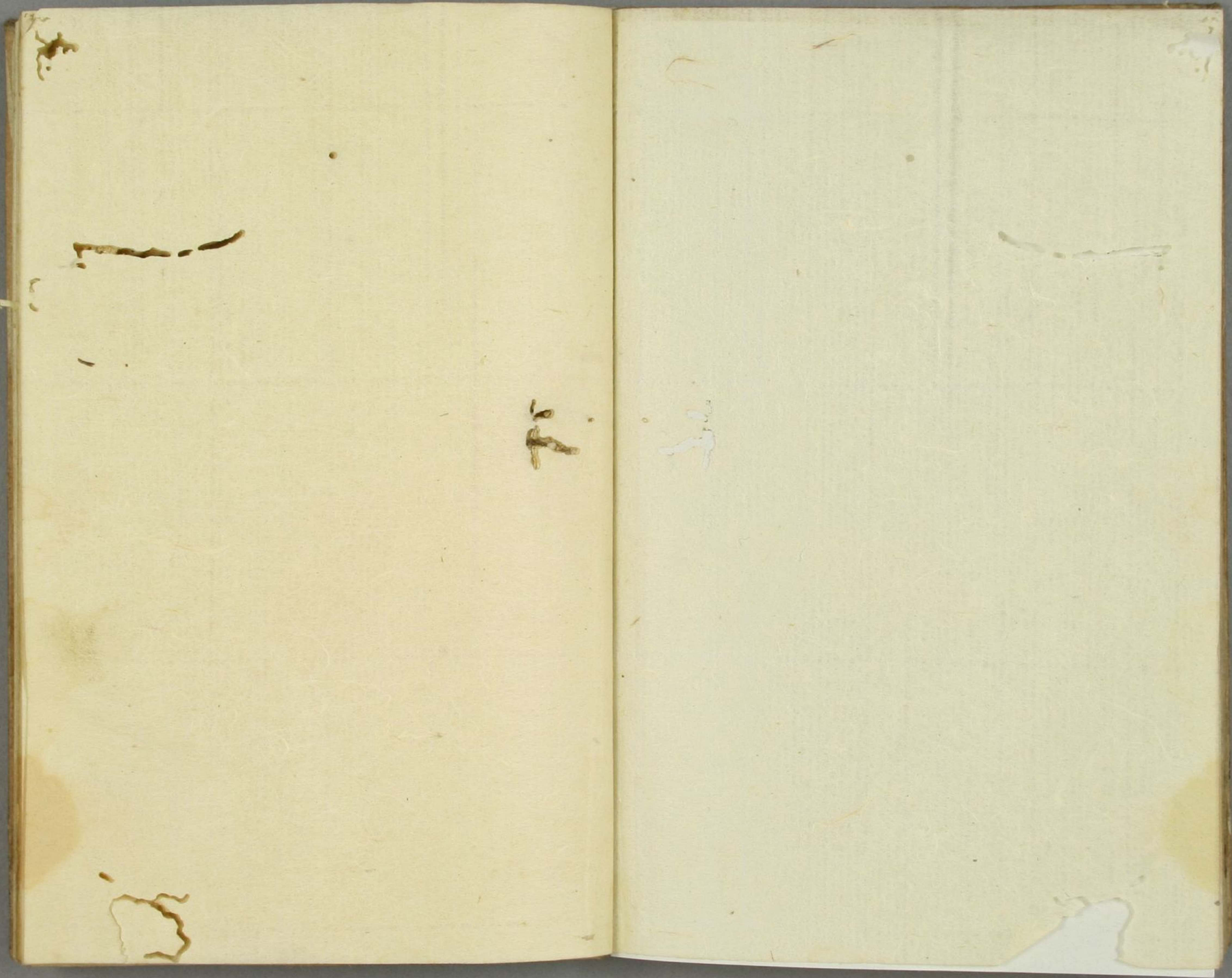
山んかぶる ことごとく 事自れ
藍瓶のや 故に 事自れ
切後の人 故に 事自れ
用らふらふをて 事自れ
其のめ 故に 事自れ
まらひ 故に 事自れ
ことごとく 事自れ
精進 故に 事自れ
故に 事自れ
ことごとく 事自れ
事自れ 故に 事自れ

夜中のてらりんを遊ばし
 本力病まきうしそ有らる
 奥改は四つ目や流らう
 名由の流流家の待をきり
 庵つら定まき無きとや
 さいおきこころまきうし
 夜中へてはけりまきうし
 神降まきぬまき流の
 ころ所今まきうし
 白鼻まきうし
 七位月階まきうし

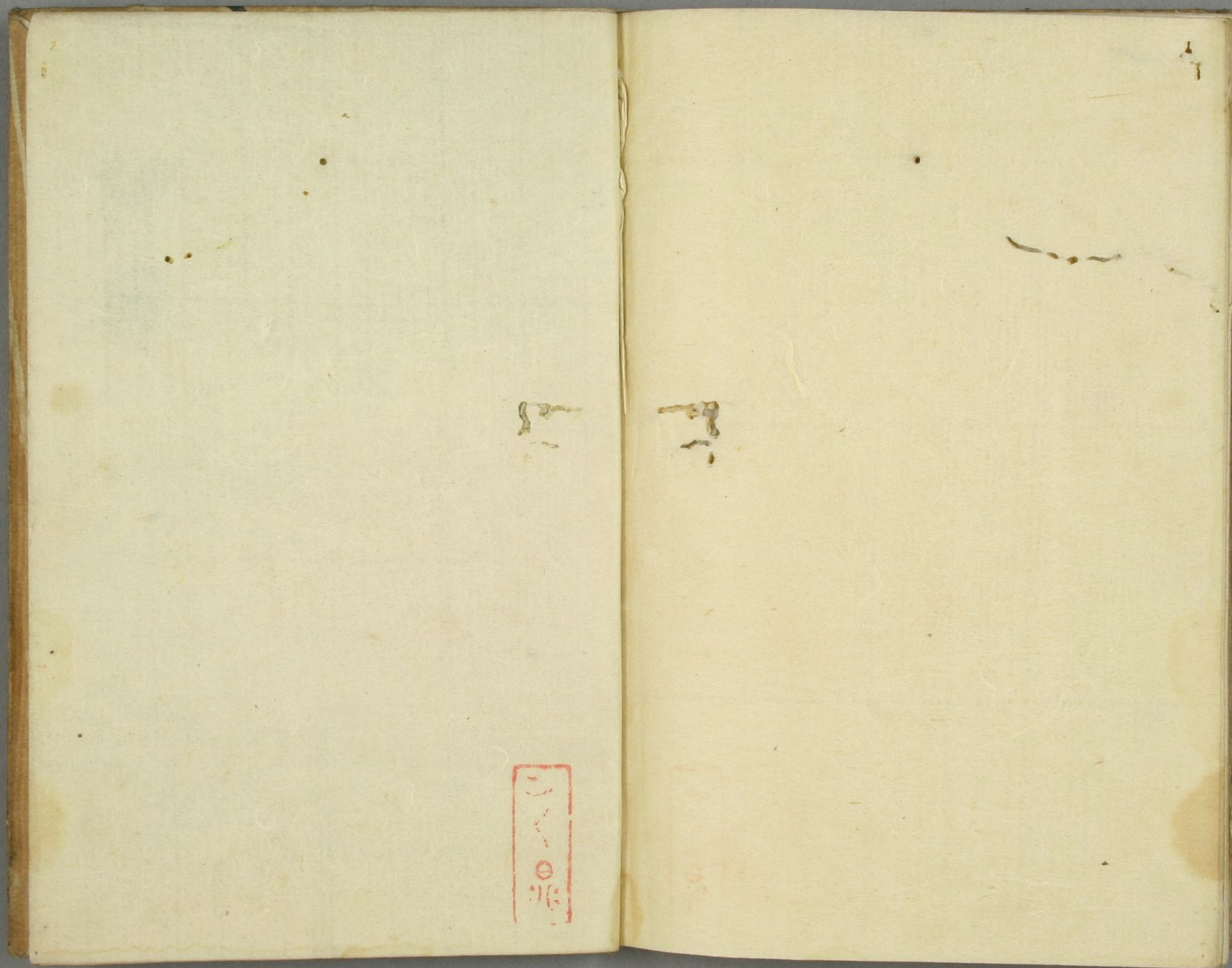
死まきうし
 暗あまきうし
 ぢうんまきうし
 たるまきうし
 ままきうし
 うまきうし
 親まきうし
 前まきうし
 後まきうし
 死まきうし
 夜中まきうし
 本力まきうし
 奥改まきうし
 名由まきうし
 庵まきうし
 さいまきうし
 夜中まきうし
 神降まきうし
 ころまきうし
 白鼻まきうし
 七位まきうし

山科の無事傍午のりめらるる中
細きあぬいざうらんざ井大の紙
お梅さん ちりりもせぬくやん
のさよめめり紙あうが四十も
とあるあなやえくすてうらん
井大さんちりりもせぬくやん
ちりりめめり紙あうが四十も
神楽もあつたあつたあつたあつた
小原のちりり紙あうが四十も
生野とちりりもせぬくやん

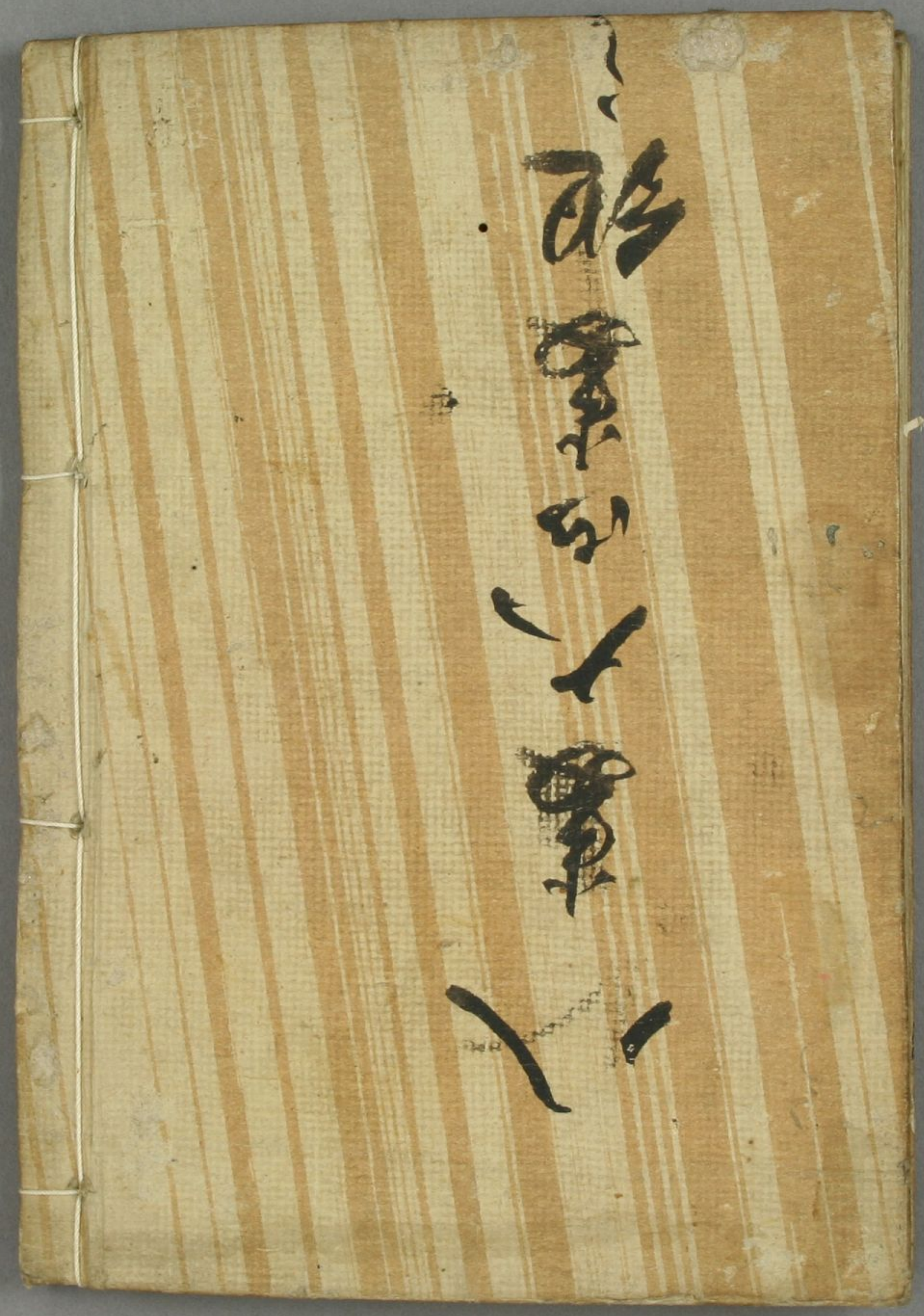
すげ山科あつたあつたあつたあつた
お梅さんちりりもせぬくやん
のさよめめり紙あうが四十も
とあるあなやえくすてうらん
井大さんちりりもせぬくやん
ちりりめめり紙あうが四十も
神楽もあつたあつたあつたあつた
小原のちりり紙あうが四十も
生野とちりりもせぬくやん



以下全て
白紙



二
ノ
○
三



石門先生集